

漢詩集『萍水奇賞』

——翻刻と注釋——

森 川 重 昭

はじめに

三年ほど前、本學職員荻須恵子氏より木版小冊子の複寫を示され、その解讀を依頼された。それは『萍水奇賞』という漢詩集で、寛政二年（一七九〇）、徳川家齊將軍襲職の琉球國賀慶使の一行が岡崎の地に立ち寄ったとき、一行中の馬克義、毛廷柱、および鄭永泰と、岡崎の文人、荻須親卿及び金澤子匹、名古屋の儒學者、岡田挺之、奥田新川、國學者の河村乾堂との間に交わされた贈答詩を輯めたものである。

今夏、小暇を得て讀むことができた。當時の地方文人の風雅を偲ぶすがの一端として、翻刻し、注釋として書き下し文と語釋を附して紹介し、併せて大方の批正を乞う次第である。

『萍水奇賞』には二種類の版本があるが、本稿が底本として用いたのは、初版に後に入木して一部の撰者名を補っているものである。翻刻に當つては、原文の誤字、略字、俗字は正字に改めた。返り點と送り假名は原文のままであ

るが、印刷の都合上、送り假名の一部を現代の表記法に改めた。なお、縦點は省略した。句讀點は筆者が補ったものである。

些か専門外の書物を讀む機會を與えて下さった荻須惠子氏、原本の借用と寫眞の掲載を許可して下さい下さった豊橋市立中央圖書館、寫眞の撮影をして下さった本學文學部教授杉戸清彬氏の皆さんに厚くお禮を申し上げます。

(一九九〇年九月)

(序)

序

寬政庚子三條琉球聘使之色
岡崎也荻金三子試投三詩而
得馬毛鄭三人之報暨途中諸
作常人徒注目之導從服飾
耳

(序續き)

之甚獨能及之自喜之餘少以考
示因志四方好子之求中求之
者殆三老日於金三子謀之諸梓
以省繕寫之勞副人之致望之
可謂 清世之出子荻苑之書也
余少時讀書坐此書之門課計

所知琉球素多編詩者然編則
其書而贈答之什實明于此
云

寬政辛亥如前一日

甘亭岡田挺之題



豊橋市 民
文化会館蔵

105763

2014.07.13. 31

(本文1葉目表)

	萍水奇賞
三河	荻洲因親卿
金澤休子匹 著	
寬政庚戌仲冬九日疏球使者宿于岡崎 明年正月九日復經此地共有唱和幸地 親方馬克義兼本親雲上毛廷柱上原親 雲上鄭永泰皆其選也一時之會便成奇 賞遂上于梓以貽同志	

(本文1葉目裏・2葉目表)

萬里遙遙絕去來先開學士不群才詩盟今 日如相許隔國風流為我裁 贈無本上原而親雲上 金澤休	答金子匹	毛廷柱
萬里梯航赴日邊驛中幸遇少陵賢鏤金捧 讀放人感更約歸程翫簡篇	送別兩親雲上	金澤休
異國之人識姓名館中通判共相盟曾親筆 視雲烟色始見衣冠鐘鼓聲遙隔千山函谷	月神飛萬里武昌城各天定有歸思感再會 裁詩慰旅情	與兼本上原兩親雲上
恭奉書中山儀衛正兼本樂師上原兩親雲 上之執事於赤坂驛之賓館曩中山王府使 者未賓之駕儼然臨焉投宿岡崎休也旅館 之側微幸得謁兩君足下實千歲之一遇感 喜之餘賦一絕以呈兩足下足下不置即賜	金澤休	

(跋)

國崎獲重之唱和詩料臣毛延柱及鄭永
春并得其遺中詩若干首珍奇不置選
錄一覽房數千卷此得後視猶待是
清所師承不知出于何人大概不過宋
之音也其書注省四要而重共在于宋
也皆王翁州歌廟鮮河翰曰滕生著其
以足厭家膳石海錯野鷺之是也子
之意亦在于斯乎夫珠玑入貢大為輕
鮮是名和蘭廟得宋廟聲詩每使云

(跋續き・刊記)

至士大夫例為唱和和蘭國字旁行勿
論辭詩年流珠頌、小國然以內附薩
州文數所單有美之鄭益是中猶有
移巨聲者不其其才藻如何書以俟定
日滿焉

尾張 藤益根



寛政三年亥正月

三洲岡崎連尺町

扇屋傳左衛門

書林

尾州名古屋本町

永樂屋東四郎

序

寛政庚辛之際。琉球聘使之過岡崎也。获金二子。試投之以詩。而得馬毛鄭三人之報。暨途中諸作。常人徒注目其導從服飾耳。豈暇屬思文翰乎。二子嗜詩之甚。獨能及之。自喜之餘。書以夸示同志。四方好事家。聞之求觀者。殆無虛日。於是二子謀上諸梓。以省繕寫之勞。副人々跂望之意。可謂清世樂事。菰苑奇賞也。余少時讀雪堂燕遊章日課詩話。知琉球素習嫺詩者。是編則其遺聞。而贈答之什。實昉于此云。

寛政辛亥花朝前一日

甘亭岡田挺之題

寛政庚辛之際。琉球聘使之過岡崎を過ぐるや、获・金の二子、試みに之に投ずるに詩を以てし、而して馬・毛・鄭三人の報、暨び途中の諸作を得たり。常人は徒だ其の導從の服飾に注目するのみ。豈に思を文翰に屬するに暇あらんや。二子詩を嗜むの甚しき、獨り能く之に及ぶ。自ら喜ぶの餘、書して以て同志に夸示す。四方の好事家、之を聞きて觀んことを求むる者、殆ど虚日無し。是に於て二子諸を梓に上せて、以て繕寫の勞を省き、人びと跂望の意に副はんことを謀る。清世の樂事、菰苑の奇賞と謂ふべきなり。余、少かりし時、雪堂燕遊章日課詩話を読み、琉球素より詩に習嫺せる者なるを知る。是の編は則ち其の遺聞けれども、而も贈答の什、實に此に昉らかなりと云ふ。

寛政辛亥花朝の前一日

甘亭岡田挺之題す

- 寛政庚辛 寛政庚戌の誤り。寛政庚戌は、寛政二年（一七九〇）に當る。
- 聘使 聘問の使者。
- 導從 前後のともびと。
- 文翰 文章筆墨。
- 夸示 誇示に同じ。みせびらかす。
- 上梓 木版で書物を出版すること。
- 繕寫 淨書する。
- 跂望 待ちこがれるさま。
- 菰苑 菰は藝の古字。藝苑と同じ。文藝の社會。
- 奇賞 すぐれたたまもの。

○雪堂燕遊章日課詩話 未詳。琉球人、程順則に、『雪堂燕遊艸』という著書があり、正徳四年（一七一四）、京都の書林奎文館瀬尾源兵衛によつて出版されている。この書は、程順則が中國に使した時、その往還滯留の間に賦した詩を輯めた漢詩集で、詩話に類するものは含まれていないが、或はこの書のことをいうのであろうか。○習嫺 嫺習に同じ。熟練する。○什 『詩經』の雅と頌の各十篇をいう。轉じて詩歌・詩篇をいう。○寛政辛亥 寛政三年（一七九一）に當る。○花朝 陰曆二月十二日、又は二月十五日をいう。○岡田挺之 岡田新川。名は宜生、字は挺之、字を以て行われる。通稱は仙太郎、又、彦左衛門。新川と號す。又別に暢園・朝陽・甘谷・杉齋などの號がある。尾張の人。本府の世臣で、業を松平君山に受けた。藩校の教授となり、後に督學に進んだ。寛政十一年（一七九九）三月二十四日歿。歳六十三。（近世漢學者傳記著作大辭典）による）

萍水奇賞

三河
荻洲因親卿 著

金澤休子匹

寛政庚戌仲冬九日。琉球、使者宿于岡崎。明年正月九日。復經此地。共有唱和。幸地親方馬克義兼本親雲上毛廷柱上原親雲上鄭永泰。皆其選也。一時之會。便成奇賞。遂上于梓。以貽同志。

萍水奇賞

三河
荻洲因親卿 著

金澤休子匹

寛政庚戌仲冬九日、琉球の使者岡崎に宿す。明年正月九日、復た此の地を經、共に唱和有り。幸地親方馬克義・兼本親雲上毛廷柱・上原親雲上鄭永泰、皆其の選なり。一時の會、便ち奇賞を成す。遂に梓に上せて、以て同志に貽る。

○萍水 浮草と水。唐の王勃の「滕王閣の序」に、「萍水相逢ふも、盡く是れ他郷の客なり」とあるのをふまえて、書名に取り入れたのであろう。

○奇賞、すぐれたたまもの。

○荻洲因親卿 荻須因。諱は景信、字は親卿、通稱は恕因・恕愼。天保八年（一

八三七）三月四日歿。歳八十四。岡崎本多家の典醫。（『新編岡崎市史13 近世學藝篇』による）

○金澤休子匹 金澤休。字は子

匹、通稱藤左衛門、東道と號した。岡崎傳馬町の宿屋柏屋の主であった。名古屋の岡田新川に學び、詩・文章を能くした。（同上）

○寛政庚戌 寛政二年（一七九〇）に當る。

○仲冬 陰曆十一月。

○唱和 詩歌を相互に贈答する。

○親方 琉球國の官名。

○親雲上 琉球國の官名。

○上梓 木版で書物を出版すること。

贈 兼本上原兩親雲上

金澤休

萬里遙遙絶 去來。先聞學士不羣才。詩盟今日如相許。隔國風流爲我裁。

兼本・上原兩親雲上に贈る

金澤休

萬里遙遙として 去來を絶つも 先 先に聞く 學士 不羣の才なるを 詩盟 今日 如し相許さば 隔國

の風流 我が爲に裁せよ

○遙遙 はるかに遠く離れるさま。

○不羣 羣衆を離れて超出する。

○詩盟 詩人のまじわり。

答 金子匹

毛廷柱

萬里梯航赴日邊。驛中幸遇少陵賢。鏤金捧讀教人感。更約歸程翫簡篇。

金子匹に答ふ

毛廷柱

萬里の梯航^{ていかう} 日邊に赴き / 驛中 幸に遇ふ 少陵が賢に / 鏤金^{ろうきん} 捧讀^{ほうどく}すれば 人をして感ぜしめ / 更に
約す 歸程、簡篇を翫^{もてあそ}ぶを

○梯航 はしごをかけて山に登り、船に乗って海を渡る。海山を超えて遠方にゆくこと。 ○日邊 王城の近く。 ○少陵 唐の詩人、杜甫のこと。少陵はもと漢の宣帝の許后を葬った陵の名。陝西省長安縣杜陵の東南に位置する。宣帝の杜陵に比べてやや小さいので少陵という。杜甫は陵西に家を構えたので、杜陵布衣・少陵野老と號した。 ○鏤金 美しい詩文の喻。 ○捧讀 兩手でさしあげて恭しく讀む。 ○歸程 かえる道すじ。 ○簡篇 篇簡に同じ。詩文。押韻の都合で簡篇とした。

送別兩親雲上 金澤休

異國文人識^レ姓名。館中通刺^ヲ共^ニ相盟。曾親^テ筆硯雲烟色。始見^テ衣冠鐘鼓聲。夢斷^ハ千山函谷月。神飛萬里武昌城。各天定有^ニ歸思感。再會裁^レ詩慰^ヲ旅情^ヲ。

兩親雲上を送別す 金澤休

異國の文人 姓名を識り / 館中 刺を通じて 共に相盟ふ / 曾て親しむ 筆硯^{ひつげん} 雲烟^{うんえん}の色 / 始めて見る
衣冠 鐘鼓の聲 / 夢は斷ゆ 千山^{かんし} 函谷^{くわんこく}の月 / 神は飛ぶ 萬里 武昌の城 / 各天定めて歸思の感有らん
／ 再會すれば 詩を裁して旅情を慰めん

○通刺 名札をさし出して面會を求める。 ○筆硯 筆と硯。轉じて文章に携わること。 ○雲烟 書畫の筆勢の躍動する形容。唐の杜甫の「飲中八仙の歌」に、「張旭は三杯にして草聖と傳ふ / 帽を脱し頂を露はす 王公の前 / 毫を揮ひて紙に落せば雲烟の如し」とある。 ○函谷 中國の關の名。河南省靈寶縣の西南。谷中にあるので、その深險な様子が似ているので名づける。後、漢の武帝の時、河南省新安縣の東北に移す。 ○神 たましい。 ○武昌城 武昌は中國の地名。城は都市、まち。今の湖北省武漢市の長江右岸地區。長江中流に位置し、函谷關と南北に遠く隔たる。 ○歸思 歸郷を思う。

與「兼本上原兩親雲上」

金澤休

恭奉「書」中山儀衛正兼本。樂師上原兩親雲上之。執事於赤坂驛之賓館^ニ。曩^ニ中山王府使者。來賀^ノ之駕。儼然^{トシテ}臨^ム焉。投「宿」岡崎^ニ。休也旅館^ノ之側微。幸得^レ謁^ス兩君足下^ニ。實^ニ千歲之一遇。感喜^ノ之餘。賦^一絕^ヲ。以呈^ニ兩足下^ニ。足下不置。卽賜^ニ高和^ヲ。他日以示^ニ張州岡田文學^ニ。文學與^ニ河村與田二子^ニ和其詩^ヲ。却寄^ニ兩君^ニ。今附呈^ス也。休也伏^{シテ}乞^フ。兩君來往途中^ノ之吟。願書^一紙^ニ。以賜^レ休。休藏^テ之。長爲^レ珍^ト。幸甚幸甚。春寒自愛^{セヨ}。明朝於^ニ岡崎客舍^ニ。期^ニ再會^ヲ也。頓首頓首。

兼本・上原兩親雲上に與ふ

金澤休

恭しんで書を中山の儀衛の正兼本、樂師上原兩親雲上の、事を赤坂驛の賓館に執るに奉る。曩^{さき}に中山王府の使者、來賀^がの駕、儼然^{げんぜん}として臨む。宿を岡崎に投ず。休や旅館の側微なるも、幸に兩君足下に謁するを得たり。實に千歲の一遇にして、感喜之餘、一絶を賦して、以て兩足下に呈す。足下置かずして、卽ち高和を賜ふ。他日以て張州の岡田文學に示す。文學、河村・與田の二子と其の詩を和し、却つて兩君に寄す。今、附呈するなり。休や伏して乞ふ、兩君來往途中の吟、願はくは一紙に書して、以て休に賜はんことを。休之^{これ}を藏して、長く珍と爲さん。幸甚幸甚。春寒自愛せよ。明朝岡崎の客舍に於て、再會を期するなり。頓首頓首。

○中山 琉球の別稱。

○儀衛正 儀衛は、儀仗の兵士。儀式に參列して護衛の任に當る兵士。正は、おさ、かしら。

○赤坂

驛 東海道五十三次の一宿。現在の愛知縣寶飯郡音羽町赤坂。

○來賀 人が訪れて來ることの敬語。

○儼然 威嚴のあるさ。

ま。 ○側微 いやしい身分。

○岡田文學 岡田挺之のこと。文學は、江戸時代、諸藩の儒者をいう。

○河村 河村乾堂。

國學者。名は益根、培二郎と稱す。乾堂はその號。秀根の第二子。家庭に學んで國學を名古屋に唱えた。文政三年（一八二〇）十一

月十一日歿。歳六十四。（『大日本人名辭書』による）
谷はその號。文政十三年（一八三〇）歿。歳七十一。（同上）
辭に用いる語。
○春寒 春のさむさ。餘寒。
○頓首 書簡文又は上書などに敬意を表すのに用いる語。

和「寄兼本親雲上」 岡田挺之

客子經過^ス水驛^ノ邊。詞才又似^ニ雪堂^ノ賢^ニ。蓬萊月色梅花^ノ影。寫得^テ無^レ端^ニ入^ニ錦篇^ニ。

兼本親雲上に和し寄す 岡田挺之

客子經過^ス水驛^ノ邊。詞才又雪堂^ノ賢^ニに似たり。蓬萊^{（ほうらい）}月色梅花^ノの影。寫し得て端無く錦篇に入る。

○客子 旅人。 ○水驛 水邊のふなつきば。 ○雪堂 岡田挺之の序にある『雪堂燕遊草日課詩話』の著者と考えられる程順則のことか。 ○蓬萊 仙山の名。東海の東にあつて、仙人が住んでいたという。轉じて富士山のような靈山の美稱。 ○無端 思いがけなく。 ○錦篇 美しい詩集。

同前 河村益根

聞君十五出^ニ南邊^ニ。負笈^{（ふきふ）}求^{（もと）}師^{（し）}選^{（えら）}巨賢^{（こけん）}。借問^{（しゃもん）}吳中^{（ごちゆう）}名士輩^{（めいしはい）}。幾人酬應得^{（しうおうとく）}佳篇^{（かへん）}。

同前 河村益根

聞く君十五にして南邊を出で。負^{（ふ）}笈^{（きふ）}師を求めて巨賢を選ぶ。借問^{（しゃもん）}す吳中名士輩。幾人か酬

應して佳篇を得たりしや

○南邊 南方の邊境。 ○負笈 遊學すること。 ○巨賢 すぐれて偉い人。 ○借問 試みに問う。 ○吳中 中國の地名。江蘇省吳縣をいう。春秋の時、吳の國都であつたからいう。 ○酬應 こたえる。應答。 ○佳篇 よい詩文。

同前 奥田永業

使者、光華照路邊。羊裘豹飾亦誰賢。我知兼本親雲上。逢著詞流卽有篇。

同前 奥田永業

使者の光華 路邊を照し / 羊裘豹飾 亦誰か賢なる / 我は知る 兼本親雲上 / 詞流に逢著して 卽ち篇有り

○光華 ひかり。 ○路邊 みちのほとり。路傍。 ○羊裘豹飾 羊裘は、子羊の皮衣。豹飾は、豹の皮で衣服を飾ることをいう。『詩經』鄭風「羊裘」の篇に、「羊裘豹飾 / 孔だ武にして力有り」とあるのによる。 ○逢著 であう。 ○詞流 詩文のなま。

贈上原親雲上。用金子匹韻。岡田挺之

樂師中認上原名。未得鷄壇暫結盟。素月寒梅先假色。提琴疊鼓迴傳聲。忽聞今夕過菅水。又說明朝至柳城。太惜詩家違會面。寧無片語寫離情。

上原親雲上に贈るに、金子匹の韻を用ふ。岡田挺之

樂師の中に認む 上原の名 / 未だ得ず 鷄壇 暫く盟を結ぶを / 素月 寒梅 先ず色を假り / 提琴
疊鼓 廻に聲を傳ふ / 忽ち聞く 今夕 菅水を過ぐるを / 又説ふ 明朝 柳城に至ると / 太だ惜しむ
詩家 會面に違ふを / 寧ろ片語の離情を寫すこと無かれ

○鷄壇 朋友の相會する處をいう。 ○結盟 ちかいを結ぶ。 ○素月 白い月の光り、或は、光の明らかな月。 ○寒梅
冬の梅。 ○提琴 楽器の名。 ○疊鼓 太鼓を小刻みに撃つ。 ○菅水 乙川のこと。岡崎の市街地を流れて矢作川に合流
する。岡崎市街地附近では菅生川とも呼ぶので菅水といった。又、平仄の都合にもよる。 ○柳城 龍城。岡崎城のこと。平仄の
都合で、龍にかえて柳の字を用いた。 ○會面 であう。面會。 ○片語 ひとこと。 ○離情 離別の悲しいころ。

同前 河村益根

海村山驛偏題名。幾處來尋水石盟。鹵簿行交青帘影。漁歌迴雜畫笳聲。碧霄霞起天台樹。紫府星廻北斗城。遠
客今逢新歲近。旅程知有故鄉情。

同前 河村益根

海村山驛 偏く名を題し / 幾處か來り尋ぬ 水石の盟 / 鹵簿行き交ふ 青帘の影 / 漁歌迴に雜ふ
畫笳の聲 / 碧霄 霞起る 天台の樹 / 紫府 星廻る 北斗の城 / 遠客 今 新歳の近きに逢ひ / 旅
程 知りぬ 故郷の情有るを

○海村 海邊の村。 ○山驛 山間の宿驛。 ○題名 登覽尋訪の歲月とその同遊の人を記す。 ○幾處 どれくらい。
○水石盟 川の中で水と石とが出合うような、人と人とのまじわりをいうのであろうか。 ○鹵簿 天子の行列。ここでは琉球國
使節の行列をいう。 ○青帘 酒屋の看板の旗。 ○漁歌 漁夫のうたう歌。 ○畫笳聲 笳は、あしぶえ。白晝に聞えるあ
しぶえの音。 ○碧霄 あおぞら。 ○天台 天台宗發祥の地、天台山。 ○紫府 神佛の居處。 ○北斗 北斗星。

○新歲 新年。

同前 奥田永業

未^レ接^二客華^一獨記^レ名^ヲ。還將^二詩句^一寄^二寒盟^一。歸裝乍^レ值^二山花^一發^ニ。旅思其如^二野鳥^一聲^ヲ。萬里鄉園賒^二海嶋^一。三川道路入^二岡城^一。此中曾有^二知音^一在^一。吟罷淒涼復別情。

同前 奥田永業

未^レだ客華に接せずして 獨り名を記し / 還^{かえ}つて詩句を將^もつて寒盟に寄す / 歸裝 乍^{たちま}ち山花の發^{ひら}くに値^あひ / 旅思 其^それ野鳥の聲を如^{いかん}せん / 萬里の鄉園 海嶋に賒^{とほ}く / 三川の道路 岡城に入る / 此^この中曾^{かつ}て知音の在^{ちいん}る有り / 吟罷^やみて 淒涼^{せりやう}復^{また}た別情

○客華 華は、ようす。客の立ちいふるまい。 ○寒盟 盟約に背くこと。 ○歸裝 かえりじたく。 ○山花 山中に咲く花。 ○旅思 旅路のおもい。 ○鄉園 ふるさと。 ○海嶋 海中の島。 ○三川 三河。 ○岡城 城は、都市。岡崎のまち。 ○知音 己の心をよく知る親友。 ○淒涼 ものさびしい。 ○別情 別離の悲しいところ。

呈^ニ覽^ニ詩稿^ニ尾張諸先生^ニ 毛廷柱

柱^ヤ也性愚^{ニチ} 本拙^レ詩^ニ。況長途日日驅馳。陽春白雪尤難^レ和^シ。惟有^ニ舊篇上^ニ董帷^一。

詩稿を尾張の諸先生に口覽す 毛廷柱

柱や性愚にして 本詩に拙し / 況んや長途 日日 驅馳するをや / 陽春 白雪 尤も和し難く / 惟だ

舊篇の董帷に上る有り

○呈覽 高覽に供する。 ○長途 ながたび。
帷は、まくばりのうち。世話役のいる所をいう。

○驅馳 馬をかけはしらす。

○董帷 董は、董事の略。會の幹事、世話役。

崎津泊舟

傍江_ニ房屋自_ラ清幽。明鏡光中絆_ヲ客舟_ヲ。村落兌來桑落_ノ酒。憑_レ舷_ニ共醉解_ニ離愁_ヲ。

崎津泊舟

江に傍りて 房屋 自ら清幽 / 明鏡 光中 客舟を絆ぐ / 村落 兌び來る 桑落の酒 / 舷に憑り
共に酔ひて 離愁を解く

○崎津 地名。今の熊本縣天草郡河浦町崎津。古くから港として榮えた。 ○泊舟 舟をとめる。 ○房屋 家屋。建物。
○清幽 俗間を離れたきよらかで靜かなこと。 ○客舟 旅路の舟。 ○兌 悅に通じる。よろこぶ。 ○桑落酒 秋の末、
桑の葉が落ちる頃に釀した酒。 ○離愁 人と別れるかなしみ。

舟中聞笛

溶溶片月照_レ舷_ヲ明。何處清風送_ニ笛聲_ヲ。今霄寂寥難_ニ獨睡_ヲ。況聞_ニ折柳_ヲ倍_ニ羈情_ヲ。

舟中笛を聞く

溶溶として 片月 舷を照して明らかに / 何れの處よりか 清風 笛聲を送る / 今霄 寂寥たりて 獨り睡

り難し／ 況んや折柳を聞きて 羈情を倍するをや

○溶溶 水の盛んに流れるさま。

○片月 ゆみはり月。

○今霄 霄は、宵に通じる。今夜。

○寂寥 しずかに淋しいさ

ま。 ○折柳 樂府、横吹曲の一、「折楊柳」のこと。梁の元帝・柳惲・劉遵、陳の後主・徐陵・江總等に辭がある。故郷を出る時、

柳枝を折って別情を歌ったもの。猶お、この詩は、唐の李白の「春夜 洛城に笛を聞く」の詩、「誰が家の玉笛ぞ 暗に聲を飛ばす

／ 散じて春風に入りて洛城に満つ／ 此の夜 曲中 折柳を聞く／ 何人か故園の情を起さざらん」を念頭においたものであ

ろう。 ○羈情 旅人のもの思い。

登遠帆樓 在大津

危樓結構近江邊。過客登臨思渺然。碧水微茫長入海。青峯點綴聳連天。揚帆遠遠漁舟去。展翅翩翩林鳥旋。

撫景 盤桓心未盡。斜陽乍落 晚鐘傳。

遠帆樓に登る 大津に在りて

危樓の結構 近江の邊／ 過客登臨すれば 思ひ渺然たり／ 碧水微茫として 長く海に入り／ 青峯點綴し

て聳えて天に連なる／ 帆を揚げて 遠遠として 漁舟去り／ 翅を展べて 翩翩として 林鳥旋る／

景を撫して 盤桓として 心未だ盡さざるに／ 斜陽乍ち落ちて 晚鐘傳はる

○危樓 高いうてな。高樓。

○結構 家屋のたたずまい。

○過客 たびびと。

○登臨 高い所に登って下方をながめる

こと。 ○渺然 きわまりのないさま。

○碧水 みどりの水。

○微茫 はっきりしないさま。ぼんやり。

○青峯 青々

とした峯。 ○點綴 點をうったようにあちこちにづらなる。

○遠遠 遠いさま。

○翩翩 鳥の身輕に飛ぶさま。

○

撫 みる。 ○盤桓 進みがたいさま。

○斜陽 ゆう日。

○晚鐘 夕暮をしらせるかねの音。

富士山

天生「富士」鎮「東瀛」。迴「壓」羣州「氣勢宏」。奇秀峨眉開「八字」。高標玉柱接「三清」。雲堆「絶巘」。祥光爛。雪積「危峯」。瑞色明。墨客由來多「咏賞」。勝名永與「世俱榮」。

富士山

天「富士」を生じて「東瀛」を鎮め。／迴「に」羣州を壓して「氣勢宏」なり。／奇秀の峨眉「八字」を開き。／高標の玉柱「三清」に接す。／雲は「絶巘」に堆くして「祥光爛」らかに。／雪は「危峯」に積りて「瑞色」明らかなり。／墨客由來「咏賞」多く。／勝名永く世と俱に榮えん。

○東瀛 東の海。瀛は、大海。 ○氣勢 いきおい。 ○宏 おおきい。 ○奇秀 めずらしくすぐれている。 ○峨眉 中國の山名。四河省峨眉縣の西南。唐の李白に有名な「峨眉山月の歌」の詩がある。ここでは富士山の喩として用いられている。 ○高標 高いいただき。標は、いただき。 ○玉柱 玉の柱。 ○三清 仙人の居處である玉清・上清・太清をいう。 ○絶巘 高い山。巘は、みね。 ○祥光 めでたい光。 ○危峯 高い峯。 ○瑞色 めでたい色。 ○墨客 書畫や詩文に巧みな人。文人。 ○由來 もとから。 ○咏賞 詩歌をつくつてめでる。 ○勝名 すぐれた名聲。

富士山

鄭永泰

不二山頭奇色開。疊「氷積」雪八垓該。巍然崩隣霄屹。百萬雲巖伏「地」來。

富士山

鄭永泰

不二の山頭「奇色」開け。／氷を疊み雪を積みみて「八垓該」はる。／巍然「崩隣」霄屹く。／百萬の雲巖「地」

に伏して来る

○奇色　すぐれた色。

○八垓　八方のはて。

○巍然　山の高く大きいさま。

○劣巔　山が高く大きくそびえるさま。

○隣霄　となりの雲。霄は、くも。

○屹　山がそばだつてけわしいさま。

○雲巖　雲のかかっているいわお。

挿空渾頂出羣峯。四節玲瓏白雪封。幾度英才囊自罄。轉頭難舍玉芙蓉。

空を挿して　渾頂　羣峯を出で　／　四節　玲瓏として　白雪封ず　／　幾度か　英才　囊自ら罄きたる　／

轉頭すれば　捨て難し　玉芙蓉

○渾頂　大きないただき。渾は、大きい。

○四節　四季。

○玲瓏　冴えてあざやかなさま。

○囊　ふくろ。

○轉頭

頭をめぐらす。

○玉芙蓉　美しい蓮花という意味で、富士山の異稱。

巍峩玉柱帶雲端。雪色晶瑩第一觀。山寺五更僧未起。東涯日上已三竿。

巍峩たる玉柱　雲端を帯び　／　雪色　晶瑩　第一の觀　／　山寺　五更　僧未だ起きず　／　東涯　日上りて

已に三竿

○巍峩　高く大きなさま。

○玉柱　玉の柱。

○雲端　くものほし。

○晶瑩　冴えてすきとおっていること。○五更　午

前四時。

○三竿　日の高く昇ったさま。午前八時頃をいう。

絶頂峻嶒聳碧蒼。日晴猶見雪凝光。若將五嶽爭高下。富士應推第一行。

絶頂峻嶒^{りようそう}として 碧蒼^{へきさう}に聳^{そび}え / 日晴れて猶ほ見ゆ 雪の光を凝らすを / 若し五嶽^もを將^{もつ}つて高下を争へば
富士は應^{まさ}に第一行に推すべし

○峻嶒 山の高くけわしく重なるさま。○碧蒼 碧も蒼も、あおい色。 ○五嶽 中國において、國の鎮めとして尊んだ五つの山。 ○行 ならび。

山寺秋月

蕭蕭瑟瑟樹間秋。古寺黃昏月色幽。萬里江山開白晝。滿天星斗豁青眸。苔階人靜曇花冷。竹院更闌寶鏡浮。一百八聲鐘響罷。老僧閑步下高樓。

山寺秋月

蕭蕭^{せうせう}瑟瑟^{せしつ} 樹間の秋 / 古寺 黃昏^{くわうこん} 月色^{かすか} 幽なり / 萬里の江山 白晝に開け / 滿天の星斗 青眸^{せいぼう}に豁^{ひら}
く / 苔階^{たいかい} 人靜かに 曇花^{どんげ} 冷やかなり / 竹院 更闌^{たけはな}にして 寶鏡^{ほうきやう} 浮ぶ / 一百八聲 鐘響罷^や / 老僧閑歩して 高樓を下る

○蕭蕭 落ち葉のものとさびしい音の形容。○瑟瑟 さびしげに冷たく吹く風の音の形容。○黃昏 ゆうぐれ。○江山 かわとやま。○星斗 ほしをいう。斗は、星宿の名。○青眸 あおいひとみ。○苔階 こけむしたきざはし。○曇花 曇華に同じ。花の名。和名だんどく。だんどく科の多年生草本。莖は二メートル内外。葉は形は芭蕉の葉に似、厚質で光澤がある。夏から秋、鮮紅色の花を總状につける。○竹院 庭に竹を栽えた書院。○更 夜の時限の稱呼。一夜を五更に分ける。○闌 たけなわ。盛りの時、又、少し盛りを過ぎた時にいう。○寶鏡 月の喩。○閑歩 ぶらぶらあるき。

看「殘菊」^ヲ

勝園「涉上趣偏濃」。況復霜枝逸色重。燕剪不教裁「冷豔」。鶯梭未許織「芳踪」。吟餘太乙生「藜火」。醉對流霞折「紫蓉」。知是盛朝深「雨露」。黃花十月有「秋容」。

殘菊を看る

勝園 涉上 趣偏に濃し / 況んや復た 霜枝 逸色重なるをや / 燕剪も冷豔を裁せしめず / 鶯梭も芳踪を織るを許さず / 吟餘 太乙 藜火を生じ / 醉ひて對す 流霞 紫蓉を折るに / 知る是れ 盛朝 雨露を深くするなるを / 黃花 十月 秋容有り

○勝園 すぐれた庭園。 ○涉上 涉は、わたし。上は、ほとり。川の歩いて渡ることができるところのほとり。
に紅葉した樹木の枝。 ○逸色 すぐれた色。 ○燕剪 燕は、みめよい。剪は、きりそろえる。美しい刈り込み。 ○冷豔 ひやかな美しさ。 白い花の形容。 ○鶯梭 鶯が林の間にあって飛び遷るのを機の梭の動くのに喩えていった語。 ○芳踪 という意味であろうか。 ○太乙 天神の名。太一・天帝と同じ。 ○藜火 藜は黎に通ず。くろい。火は、太陽をいう。くろい太陽 黄色い花。ここでは菊の花をいう。 ○秋容 秋のすがた。 ○紫蓉 むらさきの蓮の花。 ○盛朝 朝のまなか。 ○黃花

薩埵嶺

酒店留「旌蓋」。雲霞繞「海中」。地連「蛟室」近。門與「蜃樓」通。松嶺千竿、月。濤聲萬里、風。擧「頭觀」富士。白雪照「晴空」。

薩捶嶺 さうた

酒店 旌蓋を留め / 雲霞 海中を繞る / 地は蛟室に連なりて近く / 門は蜃樓と通ず / 松嶺 千竿の
月 / 濤聲 萬里の風 / 頭を擧げて富士を觀れば / 白雪 晴空を照らす

○薩捶嶺 薩捶峠のこと。静岡縣庵原郡興津町の東の小嶺。

○蛟室 蛟人之室と同じ。さめの住む所。蛟は海中に住む動物で、その爲す所が人に類するので蛟人という。 ○蜃樓 蜃氣樓。
○千竿 千本の竿。はるかに高いことをいう。

梅澤題 山茶花

膠枝椶葉鬱 相俛。深淺花紅爛爛開。岩畔露濃香似茗。隴頭雪重韻同梅。風絡繹珍珠串。照日玲瓏錦繡堆。
此種茶經未收採。山家何處乞來栽。

梅澤にて山茶花に題す

膠枝 椶葉 鬱として相俛ひ / 深淺 花紅く 爛爛として開く。 / 岩畔 露濃く 香 茗に似て / 隴
頭 雪重く 韻 梅に同じ / 風に颯りて 絡繹として 珍珠串き / 日に照りて 玲瓏として 錦繡堆し
／ 此の種 茶經 未だ收採せず / 山家 何れの處にか 乞ひ來りて栽ん

○梅澤 戰國期の地名。現在の神奈川縣中郡二宮町山西附近に比定されている。梅の名所として知られていた。 ○膠枝 曲った
枝。 ○椶葉 かどだった木の葉。 ○爛爛 爛爛に同じ。平仄の都合で爛爛とした。爛爛は爛漫の誤用。花の咲き亂れるさ
ま。 ○岩畔 岩の多い川岸。 ○茗 茶の別名。 ○隴頭 おかのいただき。隴は壟に通じる。おか。

○韻 韻と同じ。
おもむき。 ○絡繹 連なり續くさま。 ○珍珠 眞珠の異名。 ○玲瓏 冴えてあざやかなさま。 ○錦繡 にしきとぬ
いとりのあるきぬ。 ○茶經 書名。唐、陸羽撰。茶のことを記したもの。 ○山家 山中の家。

辭別小詩。書似「金子匹」。鄭永泰

岡崎經「兩次」。相會共詩篇。愧我才華拙。知君腹笥便。舊梅迎「返旆」。新柳促「歸鞭」。心急「言難罄」。洗情一幅箋。

辭別小詩。書して金子匹に似る。鄭永泰

岡崎 兩次を經／／相會して詩篇を共にす／／愧づ 我才華の拙きを／／知る 君腹笥の便なるを／／舊梅 返旆を迎へ／／新柳 歸鞭を促す／／心急に 言罄し難く／／情を洗ふ 一幅の箋

○似 ささげる。○才華 すぐれた才智。○腹笥 心の中の本箱。博學多識であることにいう。○便 口先巧みにいう。○返旆 軍を返すこと。ここでは使節一行が歸ることをいう。○幅紙。○箋 かきもの。

和「上原親雲上辭別之作」 金澤休

使者西歸路。倭遲四牡篇。中心憐「再會」。偶坐得「安便」。奏「樂傳鐘聲」。題詩把「玉鞭」。每「懷殊下及」。惜別「一華箋」。

上原親雲上辭別の作に和す 金澤休

使者 西歸の路／／倭遲たり 四牡の篇／／中心 再會を憐み／／偶坐 安便を得／／樂を奏して鐘鼓を傳へ／／詩を題して玉鞭を把る／／懷毎に殊に及ばず／／別れを惜しむ 一華の箋。

○倭遲 回つて遠いさま。 ○四牡 『詩經』小雅の篇名。「四牡」の篇に、「四牡駉駉たり／周道倭遲たり」とある。
中心 心中と同じ。心のうち。 ○憐 いつくしむ。 ○偶坐 むかい合つてすわる。 ○安便 輕快を覺えること。
玉鞭 玉のむち。筆の喩として用いている。 ○華 すぐれる。 ○箋 かきもの。

贈「幸地副使」 荻洲因

五馬翩翩向「鳳臺」_ニ。雙旗遙傍「日邊」_ニ。開。仰看禮樂周文物。又有「使君經國」才_一。

幸地副使に贈る 荻洲因

五馬翩翩_{へんぺん}として鳳臺_{ほうだい}に向ひ / 雙旗遙_{さうきはるか}に日邊_{よへ}に傍て開く / 仰ぎ看る 禮樂 周の文物 / 又 使君經國の
才有るを

○五馬 五頭の馬。太守の異稱。 ○翩翩 往來するさま。 ○鳳臺 天子の住む建物。 ○雙旗 一對の旗。 ○日邊
王城の近く。 ○文物 文化の生み出したもの。學問・藝術・法律・制度・宗教など。 ○使君 天子の命を奉じて四方に使す
る者の尊稱。 ○經國 國を經營し治める。

答「荻親卿」 馬克義

遙望_み城池列「閣臺」_ニ。及「街」瀟洒畫圖開。行人可「羨」文風盛。詩賦推敲七步才。

荻親卿に答ふ 馬克義

遙_{はるか}に望む 城池 閣臺に列し / 街に及びて 瀟洒_{せうさい}として 畫圖開くを / 行人羨_{うらや}むべし 文風の盛にして

／ 詩賦 推敲^{すいかう} 七歩の才

○城池 城のまわりの濠。 ○閣臺 臺閣に同じ。臺樹（ものみ臺）と高閣。押韻の都合で閣臺とした。 ○瀟洒 さっぱりとして清らかなこと。 ○畫圖 えす。 ○行人 たびびと。 ○文風 文藝を重んずる氣風。 ○推敲 詩文の文字をねること。 ○七步才 作詩が敏捷な喩。魏の曹植が七歩あるく間に詩を作った故事による。

贈^二兼本上原兩親雲上^一二首 荻洲因

龍門攀處接^二衣冠^一。懷裡明珠意氣寒。遙^ニ識琉球文物盛。留^レ君惜^ラ不^レ罄^ニ交歡^一。

兼本・上原兩親雲上に贈る二首 荻洲因

龍門攀^{たよ}る處 衣冠に接し／懷裡^{くわいり}の明珠 意氣寒し／遙^{はるか}に識^しる 琉球 文物の盛んなるを／君を留めて惜しむらくは交歡を罄^{つく}さず

○龍門 登龍門の略。立身出世する場所。 ○衣冠 衣冠をつけた人。官吏。○懷裡 心のうち。 ○明珠 すぐれた詩文の喩。 ○文物 文化の生み出したもの。學問・藝術・法律・制度・宗教など。

一時賓館此^ニ相攀。咫尺題^レ詩慰^ヲ客顏^一。借問^ス鄉園君到日。春花先滿七星山。

一時 賓館 此に相攀^{たよ}り／咫尺^{しせき}に詩を題して 客顏を慰む／借問^{しやもん}す 鄉園 君到る日／春花先ず満た
んや 七星山に

○一時 ひととき。 ○賓館 賓客の止宿する所。 ○咫尺 きわめて近い距離。 ○借問 試みに問う。 ○鄉園 ふるさと。 ○七星山 中國の山名。福建省霞浦縣の東南、廣東省文昌縣の北など、いくつがある。

又用「金子匹韻」

翩翩使節拂^ッ鞭來。元識英名作賦才。幸^ニ有^ニ梅花新月好。陽春白雪客中^ニ裁。

又、金子匹の韻を用ふ。

翩翩^{へんぺん}として 使節^{しせつ} 鞭を拂ひて來り / 元識^{もとし}る 英名 作賦の才 / 幸に梅花新月の好有りて / 陽春 白雪 客中に裁す

○翩翩 鳥の身輕に飛ぶさま。ここでは、鞭を振う様子の喩として用いられている。 ○英名 すぐれた名聲。
やかな月。 ○好 美しいこと。 ○客中 旅行中 ○新月 あざ

答荻親卿^ニ 毛廷柱

臘天都返遇^ニ春天。處處嶺梅花正^ニ妍^{ナリ}。在^レ驛^ニ叨承珠玉句。清新俊逸杜陵賢。

荻親卿に答ふ 毛廷柱

臘天^{ろうてん}都て返りて 春天に遇^あひ / 處處 嶺梅 正に妍^{けん}なり / 驛に在りて 叨^{みだり}に承く 珠玉の句 / 清新 俊逸^{とりやす} 杜陵の賢

○臘天 十二月。 ○春天 春。 ○處處 いたるところ。 ○嶺梅 嶺の花。 ○妍 うつくしい。 ○驛 宿 驛。 ○清新 俗氣がなく斬新なこと。 ○俊逸 すぐれてひいでる。 ○杜陵 唐の詩人、杜甫のこと。杜甫は杜陵布衣と 自稱した。

辱見^レ惠^二玉詩^一。金石之韻。感吟感吟。忙^二戰事^一。不^レ暇^レ和^二芳韻^一。故^二書^二舊作^一二絕^一。以^レ呈^レ之^一。

鄭永泰

辱^{かたじけな}くも玉詩を惠まれ、金石の韻^{めん}、感吟感吟。職事に忙しく、芳韻を和するに暇^{いとま}あらず。故に舊作二絶を書して、以て之を呈す。

鄭永泰

○金石之韻 鐘や磬などを用いる音楽のひびき。美しいひびきをいう。 ○韻 韻と同じ。 ○感吟 感嘆してよみあげるに足る傑作の詩歌。

讚^二菩提達磨畫^一

一辭^二西域^一入^二梁朝^一。掛^二錫^一嵩山^二德自饒^一。面壁端居千古事。至今^二正法永傳昭^一。

菩提達磨畫に讚す

一たび西域を辭して 梁朝^{りやうてう}に入り / 錫^{しゃく}を嵩山^{そうざん}に掛けて 德自^{おのずか}ら饒^{ゆたか}かなり / 面壁端居 千古の事 / 今に至るまで 正法 永く傳はりて昭^{あき}らかなり

○西域 中國の西方地域、中央アジア・インドなど西方諸外國の總稱。 ○梁 中國の王朝の名。六朝の一。 ○錫 道士や僧の使う杖の一種。錫杖。 ○嵩山 中國の山名。五嶽の一。河南省登封縣の北。達磨が九年間面壁した少林寺のある所。 ○面壁 壁に向つて坐禪すること。 ○端居 家のはし近くに居ること。 ○正法 正しい教義。

詠梅花

瘦影橫斜送曉風。衝寒點綴小窗東。誰憐零落三更後。吹入江城玉笛中。

梅花を詠ず

瘦影橫斜して 曉風を送り / 寒さを衝いて點綴す 小窗の東 / 誰か憐む 零落して三更の後 / 吹いて江城玉笛の中に入るを

○瘦影 やせた木の枝の影。 ○橫斜 斜に横たわる。 ○曉風 明け方に吹く風。 ○點綴 點をうったようにあちこちに
つらなる。 ○零落 草木の葉が枯れ落ちること。ここでは、梅花が散り落ちること。 ○三更午後十二時から午前二時までの
間をいう。 ○江城 かわのほとりにあるまち。 ○玉笛 玉で作った笛。美しい笛。猶お、結句は、唐の李白の七言絶句、
「史郎中欽と黃鶴樓上に笛を吹くを聴く」の轉・結の二句、「黃鶴樓中 玉笛を吹く / 江城 五日落梅花」を念頭においたもの
であらう。

送別兼本上原兩親雲上 荻洲因

星輶西返有暉光。傾蓋相逢驛路傍。通刺異邦觀禮節。呈詩賓館接文章。江山到處裁新賦。梅柳開時
向故鄉。惆悵明朝分手去。海雲千里望蒼茫。

兼本・上原兩親雲上を送別す 荻洲因

星輶西に返りて 暉光有り / 傾蓋 相逢ふ 驛路の傍 / 刺を通じて 異邦 禮節を觀 / 詩を呈して

賓館 文章に接す / 江山 到る處 新賦を裁し / 梅柳開く時 故郷に向ふ / 惆悵す 明朝 手を分ちて去れば / 海雲千里 望蒼茫たり

○星軺 使者の乗る車をいう。軺は、小さい馬車。

○暉光 かがやくひかり。

○傾蓋 たまたま途で出逢い、互に車蓋を接

近させて相語る。一見して相親しむこと。孔子と程子との故事による。『孔子家語』致思篇に、「孔子、郊にえく。程子に途に遭ふ。蓋を傾けて語る。終日甚だ相親しむ」とある。

○驛路 宿場のある道路

○通刺 名札をさし出して面會を求める。

○文章 徳の外面に表れたもの。威儀・文辭などを含む。『論語』公治長篇に、「夫子の文章は、得て聞くべきなり」とあつて、朱熹の集註に、「文章は、徳の外に見はるる者、威儀・文辭、皆是れなり」とある。

○江山 かわとやま。

○惆悵 なげき悲しむ。

○分手 人と別れる。

○蒼茫 あおおとしてひろいさま。

萍水奇賞畢

岡崎荻金二子。唱和流蚪臣毛廷柱及鄭永泰。并得其途中詩若干首。珍奇不置。錄爲一卷。屬跋于余。余始得讀琉球詩。其詩所師承。不知出于何人。大抵不過唐末之音也。其書法有四要。而其失在于未熟也。昔王弼州題朝鮮詞翰曰。滕生者。呈以其厭家膳。而海錯野鷺之是好。二子之意。亦在于斯乎。夫殊俗入貢。大爲朝鮮。遠爲和蘭。朝鮮素嫺聲詩。每使者至。士大夫例爲唱和。和蘭只國字旁行。而論彈詩耳。琉球瑣小國。然以內附薩州。文教所覃。有若毛鄭。蓋國中猶有稱巨擘者。不知其才藻如何。書以俟它日論焉。

尾張

藤益根

岡崎の荻・金二子、琉蚪の臣毛廷柱及び鄭永泰に唱和し、并に其の途中の詩若干首を得たり。珍奇にして置かず、錄して一卷と爲し、跋を余に屬せり。余始めて琉球の詩を讀むを得たり。其の詩の師承する所、何人に出づるかを知らず。大抵唐末の音に過ぎざるなり。其の書法は四法有りて、其の失は未熟に在るなり。昔、王弼州、朝鮮詞翰に題し

て曰く、滕生なる者、呈するに其の家膳を厭ひて、海錯野鷺の是好を以てす、と。二子の意も、亦斯に在るか。夫れ殊俗入貢、大いに朝鮮を爲け、遠く和蘭を爲く。朝鮮素より聲詩に嫻へば、使者の至る毎に、士大夫例ね唱和を爲す。和蘭は只だ國字旁行にして、詩を論じ殫すのみ。琉球は瑣小なる國なれども、然れども薩州に内附するを以て、文教の覃ぶ所、毛・鄭の若き有り。蓋し國中猶ほ巨擘を稱する者有らん。其の才藻の如何を知らず。書して以て它日の論を俟つ。

尾張 藤益根

○琉蚪 未詳。琉球のことか。 ○珍奇 めずらしいもの。 ○師承 師から教を承ける。 ○四要 今體詩（律詩・絕句）における詩形、押韻、平仄、對句の四つについてのきまりをいうのであらう。 ○王弼州 明、王世貞。弼州山人と號した。 ○家膳 自家の手料理。 ○海錯 豊富雜多な海産物。 ○是好 よいとして好むこと。 ○殊俗 風俗のちがう外國。 入貢 みつぎ物を以て來ること。 ○嫻 習熟する。 ○聲詩 音樂のこと。 ○旁行 横書きの文字。 ○瑣小 きわめて小さい。 ○内附 服従し來る。 ○巨擘 おやゆび。轉じて衆人に傑出した人物の喩。 ○才藻 才知と文藻。詩歌・文章の思想の豊かなこと。 ○藤益根 河村益根（乾堂）。その先祖が藤原氏の出であるというので、修して藤と稱した。

寛政三年亥正月

書林

三州岡崎連尺町

扇屋傳左衛門

尾州名古屋本町

永樂屋東四郎